新しい学校づくりの視点から
～きのくに子どもの村の学校づくり～

きのくに子どもの村学園 堀 真一郎

１ きのくに子どもの村学園とは

新しい学校をつくる会（代表・堀）が設立した学校法人で、1992年、和歌山県橋本市に小学校、94年に中学校、98年に高等専修学校を開校し、福井県勝山市にも小学校と中学校を開設している。現在、スコットランド校設立準備中。児童生徒総数270余り。

２ 教育目標の問い直し

最近の学力低下論者は、習得された既成の知識と技能の量（質ではない）という一面からのみ学校教育の目標をとらえる。しかし教育は人格全体の完成をめざす営みだ。私たちは、学校づくりの最初から「自由な子ども」を中心目標としてきた。自由な子どもとは、
(1) 感情の自由……無意識の不安、緊張、抑圧、自己否定感から解放され、情緒が生き生きと躍動し、自己意識と自己肯定感のしっかりした子ども。
(2) 知性の自由……既成の価値観から自由になり、自発的かつ創造的に考えて行動する喜びと能力をもつ子ども。
(3) 社会的自由……強烈な自我を持ち、自己主張できると同時に、共に生きる喜びを感じ、人間関係の術を身につけた子ども。

３ 教育の方法と形態の革新

上の教育目標を実現するために、現在の学校教育を貫いている教師中心主義、画一教育、書物中心主義を思い切って排除して、大胆な基本方針を徹底して実行する。つまり、
(1) 自己決定の重視……生活と学習の全面で自己決定と自由選択を導入する。
(2) 個性の尊重……個人の違いを大切にし、活動と学習の多様性を保証する。
(3) 体験から学ぶ……身近な課題に取り組み、多方面の興味と知識を育てる。

以上3原則を徹底して、しかも有機的に関連づけて実行するために、これら
シンポジウム 特色ある学校づくりとこれからの教育経営

学習の内容と方法を重ね合せて以下の学習形態を設定し、具体的なグループングおよび学習の内容と方法を決める。

(1) プロジェクト……一人ひとりが個性を発揮して体験から総合的に学ぶ形態。週14時間（中学は11時間）。衣食住の実際的な問題の解決にテーマを求め、クラスはそのテーマごとに編成される完全な縦割り学級。子どもが年度当初に選択する。

(2) 基礎学習（中学は教科学習）……「ことば」と「かず」に分かれ、できるだけプロジェクトから題材を求めた手作り教材で学ぶ。

(3) 自由選択と集会……主として図工、音楽、体育の活動。1学期ごとに選択できる。

(4) 個別学習……教師の助言のもとに個々に学ぶ。小学校では独立していない。

4 学校づくりの留意点

きのくに子どもの村は認可を受けた正規の私立学校という地位にこだわって設立された。その理由は、日本の学校教育の改革に一石を投じるには、特定の子どものための特別の学校では発言力が弱いからである。さらに教育改革とは部分的な改良であったり、教育目標や学校の機能そのものの問い直しを避けたりしたのでは、十分に意味のある改革とはならない。教育の目的、学校の役割、学習の内容と方法、大人と子どもの組織、物理的環境、教育行政などすべてを総合的に検討して、ユニークなプランを作らねばならない。

日本教育経営学会紀要第45号・2003年 133